
研究創案ノート

インド・パキスタン分離独立と暴力をめぐる記憶・語り

井坂理穂*

The Partition of India: Memory and Narratives of Violence

ISAKA Riho*

A central purpose of this research note is to examine the way in which recent studies of the Partition of India have begun to focus on people's experiences and perceptions of this event and, in particular, the massive violence that surrounded it. It shows how, in this process of reconsidering Partition, some historians have begun to criticise the existing history-writings based on the nationalist discourse, which analysed only political developments among parties and politicians.

To understand this new approach to Partition, it is necessary to look at the development of South Asian historiography from the 1980s, and more especially, important debates presented by the scholars of the so-called subaltern studies group on the 'fragments', 'oppressed voice' and 'silence' in history-writings. Some of these scholars, in order to discover where 'silence' lies, began to explore how memory of events was constructed and reconstructed by different groups of people, by interviewing them and comparing their narratives with each other and with other narratives in official documents and history books. This method is adopted by scholars such as Gyanendra Pandey and Urvashi Butalia in their works on Partition and violence.

Another source that has played an important role in drawing scholars' attention to popular perceptions of Partition and violence is a wide range of literary texts and films which depict this event. They have highlighted the hidden stories of violence and the 'silence' in official histories, and recently begun to attract increasing attention from historians. Here I introduce mainly Amitav Ghosh's novel *The Shadow Lines* (1988) as an example. Taking a hint from it, at the end of this paper I suggest a few important aspects of Partition that still need to be explored.

1947年8月のインド・パキスタン分離独立は、南アジア近代史の分野で常に中心的テーマのひとつであったが、1990年代以降、このテーマを新たな視点、方法論から描こうとする積極的な試みが注目を集めている。それまでの印パ分離独立に関する記述の多くは、なぜ、ど

* 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻, Department of Area Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

のようにして印パ2国としての独立が決定したのかという観点から、政治過程を追うものが多かった。その中には、全インド・レベルの政党や政治家、あるいはイギリス政府の議論や政策、彼らの間での交渉を中心に論ずるものもあれば、特定の地方に注目して、その内部の政治の動きを明らかにしたものも見られた。¹⁾ それに対して、1990年代以降に注目されているのは、分離がなぜ起こったのかではなく、分離独立そのものの意味を、体験した人々の「記憶」や「語り」を通して再考するという試みである。そこでは、それまでの歴史書では正面から取り上げられることの少なかった「暴力」の問題が積極的に議論され、また、女性・子供などの「周辺に追いやられた」声を回復する必要が説かれた。イギリスからの印パ独立の影には、インド、パキスタンが分離する過程で起こった各地の「コミューナル（宗派）暴動」や、ヒンドゥー、シク難民のパキスタンからインドへの移動、ムスリム難民のインドからパキスタンへの移動という現象があった。この時期に移動した人口の規模は、ベンガルとパンジャブだけで、800万から1,000万人とも言われている [Menon and Bhasin 1998: 35]。この間のさまざまな暴力事件による死者は50万から100万人にのぼるとも指摘され、女性や子供の誘拐事件も多発している。印パ分離についての現在の新しい歴史記述の試みは、これらの暴力の発生を、単に新国家誕生の過程で起きた突発的、付随的なできごととして扱うのではなく、むしろこの現象自体に焦点を当てようとしている。²⁾ また、印パ分離前後に起こった暴力、事件についての記憶や語り自体が、いかに構築されていったかを見ることによって、印パ分離を単なる「過去」「歴史」のひとつまとして捉えるのではなく、それらが現代に至るまで南アジア社会に与えている影響を考察している。この観点はさらに、インドにおいて、「歴史」としての記述が一般に1947年8月15日の印パ独立をもって終わり、独立以降については「政治学」「経済学」「社会学」などの領域で扱われてきた傾向に対しても、強い疑問を投げかけることとなった。

以下では、記憶・語りの分析を通して印パ分離を記述するという近年の試みが、どのような流れの中から現れたのかを紹介するが、特にここでは歴史の分野での動向のほかに、印パ分離の重要な側面を示唆してきたと思われる文学に注目する。さらに、現段階で記憶・語りについていかなる側面が明らかになっているのかを概観しながら、³⁾ 筆者自身が将来的に印パ分離研

1) 既存の印パ分離独立研究の特徴に関しては [井坂 1998]。

2) 暴力をいかに解釈すべきかについては、文化人類学、哲学などの分野においてさまざまな議論がなされてきた。しかし、1990年代以前の印パ分離に関する代表的な歴史記述では、分離に伴う暴力を、独立達成というできごとの影の部分として扱い、あくまでその突発性を主張する傾向が強かった。他分野での暴力論への関心が高まるのは、後述するような1980年代後半以降の学問潮流の影響を受けたのちである。さらに、印パ分離期の暴力が取り上げられにくかった背景として、植民地支配に関わる暴力事件を「非伝統的」「例外的」なもののみならず研究者の意識の存在 [田中 1998: 4] が挙げられるだろう。

3) ただし、筆者の研究対象との関係から、ここで扱うのは分離以降にインドに組み入れられた地域を対象とした研究に限定される。

究を行う際に課題としたい点を簡単にまとめたい。

前述のように、既存の代表的な研究書や、南アジア近代史の教科書における分離の記述は、1947年8月14・15日に至るまでの政治過程を中心に論じていた。一方、近年の歴史学で注目されているような民衆レベルの印パ分離をめぐる体験や認識については、歴史ではなく、主に文学や映画⁴⁾などの分野で描かれてきたのであり、この点は歴史家たち自身が認めるところである [Menon and Bhasin 1998: 7, 22; Kaul 2001: 12]。特に文学（ノン・フィクションを含む）は、分離をめぐる起こった暴力や矛盾を指摘し、「国家」や政党、政治家を中心とした歴史記述とは大きく異なる民衆の体験を示しつつつけてきた。ウルドゥー語作家、サアーダット・ハサン・マントー (1912-55) の作品はその好例である。彼の短篇「トーパー・テーク・スィング」[マントー 1988] は、分離研究の中でしばしば言及される作品であり、⁵⁾ インド・パキスタン政府が、「精神病院」患者を両国間で交換（ヒンドゥーはインド、ムスリムはパキスタンへ）することを決定したという設定の下に書かれている。ここには分離をめぐる国家の論理が、民衆の生活や実感といかに乖離したものであったかが浮き彫りにされている。

マントーや、分離期の混乱を描いたヒンディー語の代表的小説『タマス』の作者ビーシュム・サーヘニー (1915-) らは、自らの直接の体験をもとに分離に伴う混乱を描いた。さらに、彼らに続いて、書物や語りを通してこの時期の状況に間接的に触れながら育った次世代作家たちの中からも、国家中心の印パ分離の記述に疑問を提示する作品が生まれている。特に、欧米の学問・思想潮流を背景にした南アジア出身の英語作家たちの作品は、サルマーン・ラシュディー (ルシュディー) (1947-) の『真夜中の子供たち』[Rushdie 1981] やアマターヴ・ゴーシュ (1956-) の『シャドウラインズ』[Ghosh 1988] の例に見られるように、南アジアの内外で注目され、近年ではしばしば「ポスト植民地文学」としても取り上げられている。⁶⁾ ここでは1988年に発表されたゴーシュの『シャドウラインズ』を例に、その中で、印パ分離以降の国家の言説が、いかに問い直されているのかを紹介したい。後述するように、この小説には新しい分離研究の試

4) 民衆の視点から印パ分離の意味を描いた映画の代表例として、印パ分離後にインドに残ったムスリムの靴屋を主人公にした『熱い風 (ガラム・ハワー)』が挙げられるだろう。インド近代史の教科書とも言うべきスミット・サルカール『近代インド 1885-1947年』も、印パ分離の悲劇を心に訴える形で描いた作品としてこの映画を紹介している [Sarkar 1983: 453]。また、分離期の混乱を扱った代表的な文学作品が映画化・テレビ化された例として、『タマス』(原作は [サーヘニー 1991])、『パキスタン行きの列車』(原作は [Singh 1981])、『1947年 大地』(原作は [Sidhwa 1989]) などが挙げられる。このほかに、より娯楽的な性格の強い「 Bollywood映画」の中でも、印パ分離をめぐる混乱や悲劇がしばしば取り上げられている。映画に見る印パ分離の描写については、別途に検討したい。

5) たとえばこの作品は、印パ分離に関する代表的な論文や資料をまとめた [Hasan 1993] にその全文が紹介されている。後述するバーンデーの分離研究においても、「トーパー・テーク・スィング」がしばしば引用されている [Pandey 1994: 188; 2001: 43]。

6) ポスト植民地文学については [Ashcroft *et al.* 1989] を参照。

みと重なる視点が数多く含まれており、現在の印パ関係を考察するうえでも重要な示唆を与えている。

小説は、主人公「僕」が、自分自身の経験や他人から聞いた語りを回想する形で展開する。主人公は1952年にカルカッタで生まれ、そこで少年時代を過ごす。物語の軸となっているのは、主人公が大好きだった親戚の青年、トリディブが、1964年にダッカを訪問した際に、そこで「事故死」したことをめぐる謎である。トリディブの死後、長い年月をかけて、主人公はその死に直接的、間接的に関わるさまざまな語りに触れてゆく。そして、トリディブの死の背景にある南アジアの特有の社会状況を徐々に理解してゆくのである。以下に紹介する場面は、主人公が初めて、トリディブの死がダッカにおけるコミューナル暴動によるものであり、それが同時期に国境を越えたカルカッタで自分が体験したコミューナル暴動と密接に関連していたことに気づく箇所である。

1972年、デリーで大学院生として勉強していた主人公は、たまたま友人たちと1962年の中印戦争の頃の思い出話を始める。友人のひとりには、この戦争が「僕たちが子供だったときにこの国で起こったできごとの中で、一番重要だった」と述べるのだが、主人公はこれに異を唱え、自分が10代初めの頃に体験したカルカッタでの暴動の方が重要であると主張する。しかし、デリー出身の友人たちはこの暴動については記憶にないと答えたため、主人公は衝撃を受ける。

でも覚えてないのかい？と僕は言った。この暴動のことを、読んだり聞いたりしなかった？
そもそも、中国との戦争は君たちの身近で起こったわけじゃないのに—そっちは覚えているわけ？もちろん暴動のことだって、覚えているよ—覚えてはいるはずだろう？ [Ghosh 1988: 221]

だが、彼らは首を振るばかりである。友人のひとりと言う。「暴動はいつものことだ」「地方的な暴動だったんだろう」。この「いつものこと」「地方的」という言葉は示唆的である。ここには、記憶や語りの中で、できごとの重要性が序列化される様子が示されている。

そこで主人公は、この暴動の重要性を証明すべく、友人と共に図書館で暴動に関する記述を探す。暴動に言及した書物は見つからなかったが、当時の新聞を調べると、探していたカルカッタの暴動ではなく、東パキスタンで起こった暴動の記事が最初に目に入る。主人公は、その前後の新聞を読んでいくうちに、1963年12月27日にカシミールのシュリーナガル近郊にあるモスクから、ムハンマドの髪の毛として信じられている聖遺物が紛失したという事件を知る。実は、この事件をきっかけに、国も違い距離も離れている東パキスタン（現バングラデシュ）でムスリムによる抗議デモが起こり、それが東パキスタン各地で暴動に発展したのであった。さらにこの暴動の結果、ヒンドゥーの難民がインドへ流出し、それが今度はカルカッタに、

さまざまなうわさ一帯パキスタンから死体だらけの列車が到着したなどーを流布させ、ヒンドゥー教徒のムスリムに対する攻撃、暴動の引き金となった。これらの新聞記事を読んでいた主人公は、突然、トリディブの死がちょうどこの時期に起こったことを思い出す。そして、単なる事故死として聞かされていたダッカでのトリディブの死も、少年期に自分が体験したカルカッタの暴動も、ともに約 2,000 キロメートルかなたにあるカシミールでの聖遺物紛失事件と結びついていたことに気づくのである。ちなみに、この 1963-64 年の聖遺物紛失や東パキスタン、カルカッタでの暴動は、フィクションではなく実際に起こった事件であり、一時は東パキスタン、カルカッタでそれぞれ軍隊が動員され、外出禁止令が施行されるほどの混乱状態が生じている [The Hindu, 28 December 1963-17 January 1964].⁷⁾

この「発見」に衝撃を受けた主人公は、自分が長い間、ダッカでのトリディブの死とカルカッタの暴動とのつながりに気づかなかったことについて、以下のように考える。

僕は幼かったし、周りの子供たちと同じで、自分の周りの規範は真実なのだと思って育った。空間は実在すると信じていたし、距離はものを分かつのだと、物質的な実体なのだと思っていた。国家と国境は実在するのだと、国境の向こうには別の実在があるのだと信じていた。僕の語彙では、そういう異なる実在の間の関係は、戦争か友好かのどちらかだけだった。そこには、他のものが入る余地はなかった。そして、僕の語彙に当てはまらないことがらは、ただあの沈黙の裂け目の中に押しやられたのだった [Ghosh 1988: 219].

ここで指摘されているのは、国家を単位とした言説や歴史記述の中では、国境を越えて「暴力」が連鎖する現象は、国家間の「戦争」という形以外では説明することが困難であり、したがってそこにおいては 1964 年の現象は「沈黙」を強いられてきたという点である。さらに主人公は、かつて、インド・パキスタン分離を決定し、亜大陸に国境線を引いた人々に思いをめぐらす。

かつて、それほど昔ではない時代に、人々が、良識も良心もある人々が、本気で思っていたのだ一地図はすべて同じで、国境線には特別な魔法があるのだ、と、暴力を国境へ移動し、それに科学や工場に対処しようとするのが、賞賛に値することだと彼らは信じていた。そんな彼ら責めるべきではない、と、僕は自分に言い聞かせた。それが世界の公式だったのだ。彼らはその公式を、つまり国境線のもつ魔法を信じながら、国境線を引いたのだった [Ghosh

7) ちなみに、1964 年 1 月 5 日付の『ヒンドゥー』紙によれば、1 月 4 日に州政府は聖遺物が「回復」されたことを発表し、その結果、シュリーナガルの街頭では「ムスリム、ヒンドゥー、シク、その他の人々」を含む群衆が街頭でこれを祝賀した [The Hindu, 5 January 1964].

1988: 233].

この小説に表されているような、国家中心の歴史像の中に潜む「沈黙」の問題は、1980年代後半以降の南アジア近現代史の学問潮流の中で、いわゆるサバルタン研究との関係から脚光を浴び始めたテーマである。1982年に既存のエリート主義の歴史記述に対して、「下からの歴史」を掲げて始まった『サバルタン研究』シリーズは、80年代後半以降、ポストモダニズム、ポスト啓蒙主義、ポスト構造主義、ポストオリエンタリズム、ポスト植民地主義などの「ポスト」を掲げた思想潮流との関係を深めた。その中でサバルタン研究は、哲学、文学、社会学、政治学、文化人類学、心理学などのさまざまな分野の研究と交流を深めてゆく。詳細については別稿で論じたが、⁸⁾ こうした流れの中で、『サバルタン研究』シリーズに関わる研究者の間からは、エリートの言説がいかんにして民衆の声を抑圧し、隠し、「断片」化してきたのかを分析した研究が続出する。パルタ・チャタジーの『国民とその諸断片—植民地・ポスト植民地史』[Chatterjee 1993]はその代表例といえよう。これらの研究では、資料は歴史上の「事実」を表すものとしてではなく、その資料を残したエリート、支配者側の言説や認識を表すものとして、つまり、彼らが「事実」を構築した過程を示すものとして扱われた。これらの言説分析の中で特に関心が集中したのが、イギリス植民地期を通じて、南アジアの支配者層が「国家・国民(nation)」や、ヒンドゥー、ムスリム、シクなどの「コミュニティ」をどのように「想像」/「創造」したのかというテーマである。

この潮流に対しては、当初の「下からの歴史」を掲げた『サバルタン研究』とは逆行する「エリート研究」であるとの批判も寄せられた。だが、焦点がエリート言説に偏る傾向が一部で見られたとはいえ、こうした言説分析を通して、既存の歴史記述の中で「断片」として押しやられ、抑圧され、「沈黙」を強いられてきた声やできごとが次々に指摘されたことは評価すべきだろう。さらにこの流れの中で、「沈黙」していた、あるいはさせられていた存在自体を描くためのいくつかの興味深い試みも始まった。特に注目されたのが、これまで使われてきたような文字資料に合わせて、聞き取りを通してさまざまな語りや記憶を収集し、これらを対照させる方法である。たとえばシャーヒド・アミンの『事件、メタファー、記憶—チャウリー・チャウラー 1922-1992年』[Amin 1995]は、1922年2月4日に北インドの小さな町、チャウリー・チャウラーで起こった農民による暴力事件を取り上げ、植民地統治権力の下で行われた裁判の記録に表れる農民の声や、インタビューを通して収集した農民の語りの中で、事件がどのように語られ、記憶されていったのかを分析している。そこには、農民の語りの中に農民の「生の声」を見出すといった認識はなく、事件をめぐる支配者、被支配者の異なる語り・記憶が対照されること

8) 『サバルタン研究』シリーズとこのシリーズに関わった研究者たちの研究動向については、「サバルタン研究と南アジア」『現代南アジア』第1巻、東京大学出版会(2002年9月刊行)参照。

で、それらの多様な語り・記憶が相互に絡み合い、重なり合う様子が描き出されている。

印パ分離にまつわる暴力に関しては、1990年代以降のパーンデー、ブターリア、メーノーンの研究が、同様に資料と聞き取り調査を組み合わせながら、異なる語りの収集・分析を行った [Pandey 2001; Butalia 1998; Menon and Bhasin 1998]。彼らの研究に見られるのは、これまでの国家中心の言説や記述の中で「沈黙」していた、あるいはさせられていた部分を、さまざまな語りを集める中から発見していくと同時に、その沈黙がどのようにつくられるのかを追求する姿勢である。そこには、沈黙について明らかにすることで、新たな暴力や沈黙の発生を阻止したいとの意図が感じられる。その背後に、90年代以降のインドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの台頭があることは明らかである。パーンデーらの研究は、既存の印パ分離の記述や語りの特徴が、人々のアイデンティティを、ヒンドゥーかムスリムか、⁹⁾ という区分に収斂している点にあることを指摘し、この現象の特異さを主張しているが、これは現代のヒンドゥー・ナショナリズムの言説への異議申し立てであるとも言えよう。

たとえば、ウルワシー・ブターリアの『沈黙のあちら側—分離体験者たちの声』 [Butalia 1998] は、分離の歴史記述の中で「周辺に追いやられた」存在として、女性、子供、ハリジャンを取り上げ、彼らの印パ分離期の経験を列挙する。それぞれの立場から見た印パ分離の姿は、既存の記述に現れる男性中心、国家中心の語りとは顕著な相違を見せている。ブターリアが指摘した「沈黙」の一例に、分離の混乱期に暴行、誘拐された7万5千人とも10万人とも言われる女性たちの存在がある [Butalia 1998: 132, 249]。実は、女性誘拐の問題は、分離直後には政府レベルでも議論され、両政府による組織的な取組みによって、ムスリムに連れ去られたヒンドゥー女性をパキスタンからインドへ、ヒンドゥーに連れ去られたムスリム女性をインドからパキスタンへ「回復」する作業まで行われたのだが、彼女たちの存在は後の歴史記述や語りの中では「沈黙」を強いられる。¹⁰⁾ 彼女たちとは対照的に、語りの中で強調されるのは、名誉、純潔を守るために自殺、他殺の形で「殉死」した女性たちである [Butalia 1998: 208]。

一方、ギャーネーンドラ・パーンデーの『分離の記憶—インドにおける暴力、ナショナリズム、歴史』 [Pandey 2001] は、印パ分離期の「暴力」がその後いかに記述され、語られていったのかを、理論的、体系的に明らかにすることを試みている。パーンデーがこれまでも繰り返し強調しているように、インドにおける既存の歴史記述では、暴力は「他人」のできごととして、歴史の領域では扱えない説明不可能な現象として扱われてきた [Pandey 1994; 2001: 49]。パーンデー

9) シク教徒については、印パ分離の記述、語りの中では、ヒンドゥー教徒と利害を共有しているとされ、ムスリムと対立する集団として扱われている。

10) 印パ分離期の女性誘拐の問題は、これをテーマにした小説 [Sidhwa 1989] が1999年に『1947年 大地』のタイトルで映画化され、注目を集めた。なお、原作のタイトルは *Ice-Candy-Man* だが、アメリカ版ではタイトルは *Cracking India* に改められている。

は、暴動に関する報告書や報道、政府・政党の声明、回想録、体験者たちの語りなどを対照させることによって、暴力についての歴史記述が、国家や国民のあり方を特定の形に構築するための政治過程と密接に結びついてきた現象を指摘する。そして、現在の近代国家のあり方や、それに基づくこれまでの歴史記述に対して、これらが自然なもの、不変的なものではなく、あくまで構築されたものであるとの認識の上に立ち、現代の「国家」に代わる、より包括的な政治コミュニティをつくり出すことを期待するのである [Pandey 2001: 205]。

こうした研究が、記憶・語りに焦点を当てながら、印パ分離期の歴史記述における沈黙、特に暴力にまつわる沈黙を指摘し、この沈黙がつくられた過程を明らかにすることを試みた点は評価すべきであろう。だが、やはり気になる点としては、「暴力」をめぐる記憶や語りの分析が、「暴力」自体の理解、把握にどのようにつながるのかという問題が挙げられる。即ち、暴力を歴史記述の中で描くためには、暴力がどのように語られてきたのかを論ずるだけではなく、個別の暴力の事例について、その政治・経済・社会的背景を明らかにする作業を、語りの分析と補完しあう形で進める必要があると思われる。たとえば、語りの中で目につく要素のひとつに「うわさ」の存在があるのだが、語りの中に現れるこうした要素を手がかりに、関連する背景—その社会における情報の伝達のあり方や人的ネットワークなど—を押さえてゆくことが不可欠である。

また、ここで紹介したような研究が、主に北インドで印パ分離期の暴動、人口移動を直接的に体験した地域に集中している点にも留意したい。他地域、たとえば南インドにおいては、印パ分離の記憶・語りはどのように構築されたのであろうか。パーンデーの研究などで示されている通り、一般に北インドにおいては、人々のアイデンティティをヒンドゥーかムスリムかという点に収斂する言説や、それをインド、パキスタンへの帰属と重ねる言説が、分離の経験の中で台頭する現象が見られた。しかし、これらの言説がもつ影響力は、地域ごとの状況に大きく左右されていたと予想される。たとえばカースト間の対立が顕在化していた地域においては、ヒンドゥーかムスリムかというアイデンティティの重要性は、州自体が印パに分割されたパンジャーブやベンガルの場合とは大きく異なっていたであろう。

民衆の印パ分離の体験を分析した歴史研究は、筆者がフィールドとしているインド西部、グジャラート地方についても十分に進んでいない。この地域についての20世紀前半に関する歴史研究の中心は、グジャラート出身のM・K・ガンディーや、ガンディーの指導・影響下で展開された反英運動、非暴力運動である。¹¹⁾ 1941、46年にグジャラートの中心都市、アム

11) ただし近年では、ハーディマンやスカリアのアディヴァーシー（トライブ、先住民）研究などの例に見られるように、グジャラート内部の社会や歴史像の多様性に注目が集まっている [Hardiman 1987; 1994; 1996; Skaria 1999]。

ダーヴァード（アーメダバード、アフマダーバード）で起こったコミューナル暴動や、印パ分離以降のグジャラートからパキスタンへのムスリム移民・パキスタンからグジャラートへのヒンドゥー移民については、この地方の近代史研究の中でほとんど取り上げられてこなかった。¹²⁾

印パ分離に関連して筆者が考えているもうひとつの課題は、分離やそれ以降に起きた「暴力」の地理的空間を超えた連関性の問題である。この連関性は、前述の『シャドウラインズ』の中で巧みに表現されている。主人公は、カシミールの聖遺物紛失事件と東パキスタンでの暴動の発生について知った後に、地図とコンパスを用いながら、最初に暴動が生じた東パキスタンの町、クルナを中心にして、カシミールのシュリーナガルが円周上にくるような円を描く実験を行う。

ユークリッド空間のきちんとした秩序の中では、カルカッタまでの距離は、デリーよりもタイのチェンマイからの方がずっと近いし、シュリーナガルよりも中国の成都からの方が近いのだ。でも僕はこの円を描くまで、チェンマイや成都のことなど聞いたこともなかった。その一方、デリーやシュリーナガルのことは、思い出せないぐらい小さなころから聞いていた。トリディブの地図は、クルナまでの距離は、シュリーナガルよりも、ハノイや重慶からの方が近いことを教えてくれたけれど、クルナの人たちはベトナムや中国南部（ほんの目の先にある）のモスクの運命を少しでも気にしただろうか？ 気にしなかっただろう。でもモスクがこちら側の方向にあると、たった1週間で… [Ghosh 1988: 232].

現実には、南アジアにおける地理的空間を超えた「暴力」の連関性は、これまでさまざまな形で現れている。印パ分離の混乱期に各地で起こった暴動をはじめ、記憶に新しい事例としては、1992年にアヨーディヤーで起きたヒンドゥー教徒によるモスク破壊事件が、即座にインド国内の主要都市でヒンドゥー・ムスリム間のコミューナル暴動を生じさせたことが挙げられるだろう。この事件により、パキスタンやバングラデシュの一部においても緊張が高まった。また最近の例では、2002年2月27日に、アヨーディヤーのヒンドゥー寺院建設運動に参加したヒンドゥー教徒たちの乗っていた列車が、アフマダーバード近郊にあるゴードラーでムスリムによって襲撃され、これがグジャラート各地（特にアフマダーバード）に「飛び火」して、ヒンドゥー教徒のムスリムに対する大規模な攻撃が行われた。この間に殺害されたムスリムの数は、4月半ばの報道では700人にのぼるとされている [India Today, 11, 18, 25 March, 8, 15 April

12) ちなみに、筆者は1998年、アフマダーバードで1940年代にグジャラート・カレッジなどの高等教育機関に在籍していた5名の人々について、個別にインタビューを行った。彼らの語りの中で、1941、46年のコミューナル暴動や移民に関する描写にはいくつかの重要な相違が見られたが、この点については今後、資料調査や聞き取り調査を進めたいと検討したい。

2002]. このように、ある「暴力」事件が、物理的距離に関わりなく、他の都市や村、地域、時には国境の向こう側にまで「飛び火」する現象は、どのように理解すればよいのだろうか。ここで考察されなければならないのは、南アジアの政治的背景や、種々の組織のネットワーク、情報・うわさの役割などに加えて、そうした中でつくられる人々の空間感覚—即ち、他地域で起きたどのような事件がどれほどの「近さ」、緊迫感をもつのか—という点である。グジャラート州を例にしながら、この「近さ」の感覚、空間概念が、印パ分離を通じてどのように変化してゆくのかを、内部の異なる集団や異なる地域（たとえば、植民地期に藩王国であった地域と英領であった地域、¹³⁾ 都市と農村、など）に注目しながら検討していくことも、将来の課題としたい。¹⁴⁾

引用文献

- Amin, Shahid. 1995. *Event, Metaphor, Memory: Chauri Chaura 1922-1992*. New Delhi: Oxford University Press.
- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths and Helen Tiffin. 1989. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-colonial Literatures*. London: Routledge. (アッシュクロフト, ビル; ガレス・グリフィス; ヘレン・ティフィン. 1998. 『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳, 青土社)
- Butalia, Urvashi. 1998. *The Other Side of Silence: Voices from the Partition of India*. New Delhi: Penguin Books. (ブターリア, ウルワシー. 2002. 『沈黙の向こう側—インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声』藤岡恵美子訳, 明石書店)
- Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.
- Ghosh, Amitav. 1988. *The Shadow Lines*. New Delhi: Ravi Dayal Publisher.
- Hardiman, David. 1987. *The Coming of the Devi: Adivasi Assertion in Western India*. New Delhi: Oxford University Press.
- _____. 1994. Power in the Forests: The Dangs, 1820-1940. In David Arnold and David Hardiman eds., *Subaltern Studies VIII*. New Delhi: Oxford University Press, pp. 89-147.
- _____. 1996. Farming in the Forest: The Dangs 1830-1992. In Mark Poffenberger and Betsy McGean eds., *Village Voices, Forest Choices: Joint Forest Management in India*. New Delhi: Oxford University Press, pp. 101-131.
- Hasan, Mushirul ed. 1993. *India's Partition: Process, Strategy and Mobilization*. New Delhi: Oxford University Press.
- 井坂理穂. 1998. 「インド・パキスタン分離独立—中央の論理・地方の論理—」『岩波講座 世界歴史24

13) 現在のグジャラート州は、イギリス植民地期にはその一部の地域は英領ボンベイ管区（後にボンベイ州）の中に含まれ、残りの地域は多数の藩王国によって占められていた [Menon 1956]. インド独立を機にこれらの藩王国はインドに統合され、その後の度重なる州再編によって、最終的には1960年に現在のグジャラート州が成立する。さらに、グジャラートにおける空間概念という点では、この地域がパキスタンと国境を接しているという地理的条件も考慮する必要があるだろう。

14) 具体的な方法論については検討中だが、まず手がかりとして、アムダーヴァードを中心に、新聞報道や回想録、インタビューで収集した語りの中で、どの地域がどのような形・比重で言及されているのかについての通時的な変化を追うことから始めたいと考えている。

- 解放の光と影 1930-40年代』岩波書店, 185-205.
- Kaul, Suvir. 2001. *The Partitions of Memory: The Afterlife of the Division of India*. New Delhi: Permanent Black.
- マントー, サアードット・ハサン. 1988. 「トーパー・テーク・スイング」『黒いシャルワール』鈴木 斌・片岡弘次編訳, 大同生命国際文化基金, 15-29.
- Menon, Ritu and Kamla Bhasin. 1998. *Borders & Boundaries: Women in India's Partition*. New Delhi: Kali for Women.
- Menon, V.P. 1956. *Integration of the Indian States*. Madras: Orient Longman.
- Pandey, Gyanendra. 1990. *The Construction of Communalism in Colonial North India*. New Delhi: Oxford University Press.
- _____. 1994. The Prose of Otherness. In David Arnold and David Hardiman eds., *Subaltern Studies VIII*. New Delhi: Oxford University Press, pp.188-221.
- _____. 2001. *Remembering Partition: Violence, Nationalism and History in India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- サーヘニー, ビーシュム. 1991. 『タマス』田中敏雄訳, 大同生命国際文化基金.
- Rushdie, Salman. 1981. *Midnight's Children*. London: Vintage. (ランシュディ, サルマン. 1989. 『真夜中の子供たち』寺門泰彦訳, 早川書房)
- Sarkar, Sumit. 1983. *Modern India: 1885-1947*. New Delhi: Macmillan. (サルカール, スミット. 1993. 『新しいインド近代史一・二下からの歴史の試み』長崎暢子・白田雅之・中里成章・粟屋利江訳, 研文出版)
- Sidhwa, Bapsi. 1989. *Ice-Candy-Man*. New Delhi: Penguin Books.
- Singh, Kushwant. 1981. *Train to Pakistan*. New Delhi: Time Books International.
- Skaria, Ajay. 1999. *Hybrid Histories: Forests, Frontiers and Wildness in Western India*. New Delhi: Oxford University Press.
- 田中雅一. 1998. 「暴力の文化人類学序論」田中雅一編著『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会, 3-28.

新聞・週刊誌

- The Hindu*. 28 December 1963-17 January 1964.
- India Today*. 11,18,25 March, 8,15 April 2002.